

衣食住生活

研究・活動レポート

第 5 号

目 次

「活動報告」

ー衣生活研究部門ー

山縣市とのコラボレーション 2019

ー機能的なワーキングウェアの提案ー

防災に関する研究&防災講話	3
「ECO+ものづくりプロジェクト」の活動報告	11
第 11 回 手づくり絵本コンクール	13
第 7 回 伝統文化裁縫コンテスト	14
第十回 岐阜マザーズコレクションコンテスト参加	15

ー食生活研究部門ー

第 12 回 高校生朝ごはんコンテスト	19
---------------------	----

ー住生活研究部門ー

各務原市空き家リノベーション事業	22
根羽村森林組合との連携事業	26
実習棟リノベーション工事	28
第 11 回わたしの住まいのリフォーム・デザイン案コンテスト 2019	30

衣 生 活 研 究 部 門

〔活動報告〕

山県市とのコラボレーション2019

ー機能的なワーキングウェアの提案ー

防災に関する研究&防災講話・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

生活科学研究会 藤木 節子

「ECO+ものづくりプロジェクト」の活動報告・・・・・・・・ 11

齋藤 益美

第11回 手づくり絵本コンクール・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

児玉 愛子・藤木 節子

宮本 教雄・高橋 正司

齋藤 益美・三輪 聖子

第7回 伝統文化裁縫コンテスト・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

児玉 愛子・藤木 節子

三輪 聖子・齋藤 益美

第十回 岐阜マザーズコレクションコンテスト参加・・・・・・・・ 15

藤木 節子

◆目的

昨年度に引き続き、山口市の児童館こどもげんきはうす職員の方用夏のワーキングウェアの提案を新たに行うことになった。継続テーマで、より研究会メンバー(リーダー)の縫製技術やデザイン力のレベルアップとともに地域連携・コミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。また、自然災害が多い最近の現状を考えて、今年度新たに生活科学専攻学生の防災に対する意識を高めるために防災に関する研究及び地元で活躍しておられる防災士からの講話を開催した。

◆研究方法は、以下の通りである。本研究では、こどもげんきはうす夏用のワーキングウェアのデザインを新たに考え、職員の方にデザイン画を見て貰い意見をいただき、デザインを選定して製作を行った。

防災に関する研究ではまず学生の実態を把握するために、質問紙調査法を用いて調査を行った。結果はさぎ草祭にて展示した。

◆活動結果・考察

(1)機能的なワーキングウェアの提案

①デザイン提案・打ち合わせ

こどもげんきはうすの職員の方に、研究会で考えたデザイン画を見てもらい、職員の方が求めておられるポイントなどについて打ち合わせを行った内容は以下の通りである。

- ・ハンカチなどを入れたい。→大きめのポケットがあると良い。
- ・えりぐりが広いデザインだと胸元がみえてしまう。
→着るときに頭が通るゆとりを、ボタンなどで調節する。
- ・無地もいいが、紺色などの濃い色だと子供のよだれがついたときに目立ってしまう。
→花柄、チェック、水玉模様などを使うと汚れが目立たない。
- ・マジックテープで取り外しができるデザインは面白いが、洗濯が困難である。
→スナップボタン、刺繍などを使用。
- ・シンプルなデザインのものは生地などに変化をつけるとよい。
→タオル生地などを使用し、変化を持たせる。

子供と接する視点で、良い点や無いほうが好ましい装飾などについて理解することができて、より良いワーキングウェアの提案を行うことができたと考える。



図1ー1 げんきはうす職員との打ち合わせ

②作品製作

こどもげんきはうすのエプロンは①「普段使えるエプロン」・②「シアターのようなストーリー性のあるエプロン」・③「1枚のみで着ることのできる服の機能を備えたエプロン」の3点を製作することが決まった。布地選びとともに、話し合いで出た意見にこたえられるよう、製図、裁断、縫製と作業を進めていった。完成した作品は下図の通りである。

図 2-1 作品①



作品②



作品③



③評価 製作したワーキングエプロン3点を中間発表で展示した。

研究会役員八名がエプロンのデザイン一人 1 点を考え、こどもげんきはうすに提出して打ち合わせの結果、②の3点を製作することができた。

ワーキングウェアとしての安全面や動作に伴う布地の動き、洗濯し易さ等デザイン優先ではなく考慮すべき事項はいろいろとあり、更に研究推進の必要性があるため、継続したいと考える。

(2) 防災に関する研究&防災講話

生活科学専攻の学生の防災に対する意識調査をするために、質問紙調査法を用いてアンケート調査を行った。実際に使用した質問紙とその結果、分析結果は以下の通りである。

①調査テーマ： 防災などに関する意識調査

②報告年月日： 2019 年 8 月 3 日

③調査目的：私たちの住む日本は豊かな自然がある一方で、河川の氾濫や土砂災害をはじめとする様々な災害に備える必要がある。熊本地震や広島、岡山などの集中豪雨による被害など、自然災害により甚大な被害が発生した。そこで、いつ発生するかわからない地震や土砂災害など、自然災害発生時の被害への対策方法を考えるために、意識調査を行う。

④調査の規模：岐阜女子大学の生活科学専攻 1～4 年生全員を対象とし、調査を進めた。2 名は未回答。そのため 1 年生 14 人、2 年生 8 人、3 年生 17 人、4 年生 7 人の合計 46 人のアンケート結果について一部掲載する。



図3-1 学生回答者の出身県別数(人)

⑤集計と分析

問1 あなたが一番身近に感じている災害は何ですか。1 つ選んで○を付けてください。

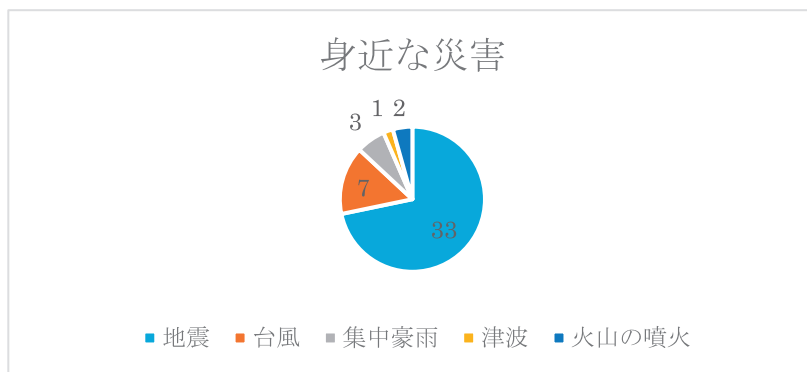


図3-2 身近な災害 選択者数(人)

身近な災害だと感じている災害は地震が 33 人と一番多い。次いで台風の7人であった。

問2 あなたの現在住んでいるお宅では、大規模災害に備えていることはありますか。

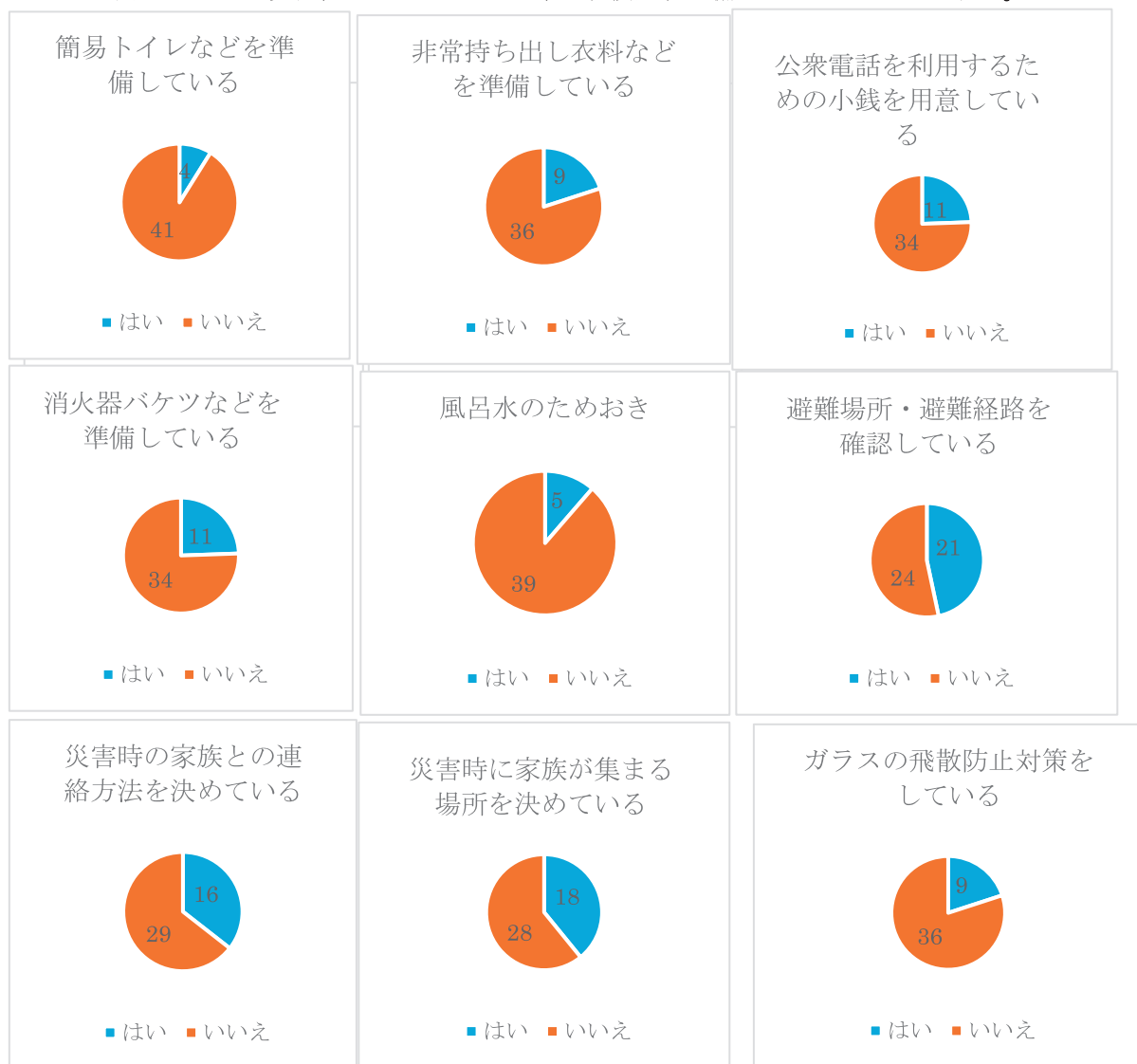
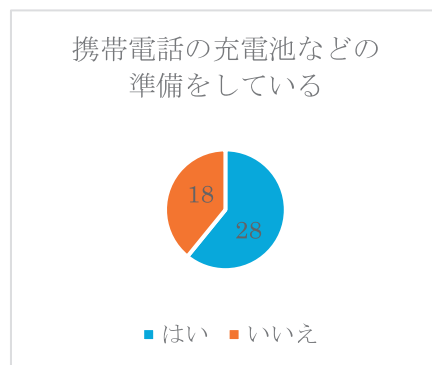


図3-3 災害時の備え状況(人)

大規模災害に備えていることについての結果は図3-3のとおりである。

図3-3のように円グラフを並べてみると、「携帯電話の充電電池、携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などの準備をしている」が一番備えている人が多いことが見てわかる。この質問のみが半数以上の学生が備えていると回答している。



ニ番目に多かったのは「食料、飲料水を備蓄している」であった。

⑥結論として

問 2 で災害に対して備えていることを聞き、大半の人が何かしらは備えているという回答が多かった。それに対し、地域での避難訓練に参加している人が少ないことが分かった。これは災害への関心はあり、もし災害が起こった時に役に立てるように準備はしているが、実際に災害が起こった時に自分がどう動けばよいのかわかっているのかということと不安が残る。家にいるときに災害が起こった時に、地域で動ける人材として私たち大学生も例外ではない。どの様な状況に陥るかわからないため、何度も訓練に参加し、対応できるようになりたい。避難訓練に参加するよう促す必要があるようだ。

災害用伝言ダイヤルをよく知っている人は、実際に自分が災害時や防災訓練などで体験したことがある人しかいないということが判明した。概要だけや名前だけ知っていても災害時には何も役に立たない。使ったことがある人しか知らないのであれば、実際に体験する機会が必要なのだと思う。実際に自分で使ってみることによって覚えやすいし、災害時にスムーズに使えると考える。

非常用持ち出し袋を準備している人は全体の半分もいなかった。住んでいる状況に分けてみると、実家で暮らしている人の家には寮、一人暮らしをしている人の家よりも準備している家が多かった。それに比べ、寮で暮らしている人、一人暮らしをしている人は準備をしていない人の方が多かった。寮で暮らしている人は周りに友達がいるため安心であるが、一人暮らしをしている人は周りに頼れる人がおらず、災害時に危険である。

基本的に自分のことは自分で守らなければならないため、一人暮らしをしている人ほど非常用持ち出し袋を準備しなければならない。非常用持ち出し袋が必要だとわかっていても何を入れればよいのかわからない人がいると思う。そのため、何が必要であるかなどのリスト、使用方法などを添えて情報を共有しなければならないと思う。

データを整理する中で、災害に向けていろいろ準備しないといけないとわかっているが、どうしたらいいのかわからないという印象を受けた。災害についての関心はあるが、行動に移せていないという現状である。

このような状況から私たち研究会は岐阜女子大学生活科学専攻の学生に、災害時に困らず動けるようになってもらわなければならない。まずは災害用伝言ダイヤルについての理解、避難訓練の参加を促すこと、非常用持ち出し袋の準備を促すことから取り掛かりたいと考える。

第 13 回生活科学専攻定例講演会について

日時：令和元年 12 月 13 日（金）

会場：岐阜女子大学 10 号館

講師：川田 力 先生（山県市在住 防災士）

内容：「 災害時の自助と共助について考える 」

定例講演会を終えての学生レポートを以下に紹介する。

○ 川田 力さんから防災について話を聞いた。今までの災害の詳しいニュースやその時の映像を見た。実際に映像を見ると、その時の地震のすごさや津波の怖さがとても分かった。地震が来たら校庭に集まる。これが正解ではなく、津波が来るか、火事かをしっかり判断することが大切だとわかった。SNSがすべて正しいかと言ったらそうではないが、情報を素早く知らせてくれるのがSNSである。SNSは私たちを助けてくれることがあり、大切な情報網である。実際にSNSによって助かったという記事を見た。今の時代は、すぐに情報が入り間違った情報もあるため、日頃から見極める力をつけなければならないと思う。

たくさんの震度6以上の地震が起こっているが、最近では1年に何度も起こっていて、いつ南海トラフが来るかわからない。すごく大きな地震になるため、防災バッグや避難所の確認を忘れないようにしておかないと、いざ起こった時に対応できない。そして、今までに大きな地震にあったことない若い人たちが、「大丈夫だろう」と安心しているその油断が大きな被害になるのではないかと思った。機会がないと災害について考えることはない。

今回のような、考えさせられる講演を通して、もっと危機感を持ち、被害にあっても対応できるような人が増えたらと感じた。体験した、災害時のトイレをいつか起きた時に実践でき、誰かに教えられたらいいと思った。

4年 東方 梨華

○ 日本では近年様々な災害が起こっているし、南海トラフ地震も懸念されているため、災害時の対策について考える機会は重要だと思った。阪神淡路大震災の時に助けられた人の多くは地域の住人の助けだったことも知り、地域の人々と日頃から関わりを持っていくことが大切だと思った。また、地震が起こった時に備えた家具の配置や転倒への対策ももう一度考えて、見直してみようと思う。断水の際のトイレの対策なども、実演と合わせて学ぶことができてよかった。

私が今までに経験したのは、昨年の台風による停電・断水くらいだけれど、1日の停電・断水だけでも不安であったし、食料も火や電気、水がないと食べることができないものが多いことにも気づいたので、その時から以前よりもよく考えるようになったと思う。しかし、今回の講演を通して、まだまだ足りないと思うところがあったので、しっかりと考えるようにした。

大規模災害はいつ起こるか分からないし、いつ起こってもおかしくないなので、今後起こっても大丈夫のように、日ごろからの備えを怠らないようにしたい。また、万が一に備えて、避難場所や方法実家に帰るときに止まる可能性のある道なども調べ、冷静に対処していけるようにしたいと感じた。

今回学んだことは、自分で身に着けるほか、家族や友人にも伝えて広めていきたい。

3年 大森 祐奈



図4 新聞記事切り抜きの展示(さぎ草祭にて)



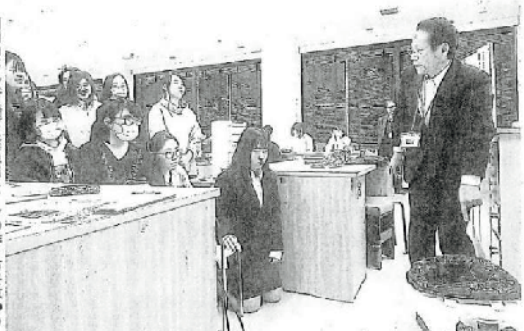
○ 今回、防災について今まで知らなかった知識を知ることができた。東日本地震が起きた時は、まだ小学生で地震を体験した時は今までで一番の驚きだった。少し長い揺れが来て、命の危険を感じたことを覚えている。その後テレビを見たら東日本地域が津波のすごい被害を受けていて、本当に言葉が出なかった。もしあの時、東日本だけでなく、自分たちの住む場所も同様な状況だったらパニックになっていたと思う。

川田さんが、普段から近所の人と仲良くなって、災害の時は助け合うことが大切と言っておられたので、今は一人暮らしだけれど、せめて一人くらいは住まいの近くに知り合いを作っておくべきだと思った。自分でも、自分の身を守るように、防災グッズを用意したり、非常食も用意しておかなければいけないと思った。

2年 角野 はづき

12月13日の定例講演会について、新聞に掲載された記事を紹介する。

岐阜女子大生が記事収集、意見交換



川田刀さん(右)に緊急用トイレの作り方を教わる
生活科学科の学生ら。岐阜市太郎丸、岐阜女子大

防災力、新聞で強化

緊急トイレの作り方も学ぶ

岐阜女子大家政学部生活科学科の学生約50人が、防災の担い手を目指すワークショップを開き、災害の新聞記事をもとにした意見交換などを行った。

(村瀬真未)

学生が自主運営する生活科学科研究会が企画。学生の多くが家庭科教員を志しているため、子どもを守り、地域に貢献しよう、衣食住の視点から毎年テーマを設定して学んでいる。

本年度は「防災力を身に付ける」がテーマ。同会の中心メンバーが大雨時の避難所運営などの記事を収集し、住民としての役割

割や被災後に想定される問題への理解を深めてきた。

この日は、記事のパネル10枚を見ながら、防災用品を身近に置くなど、日頃からできる備えについて活発に意見を交わした。

また、昨年の台風21号で県内に住んでいた一部の学生が断水に見舞われ、トイレの必要性を実感したため、山県市観光協会の観光広報部副部長で防災士の川田刀さん(73)から緊急用トイレの作り方を教わった。

解固剤やビニール袋を使った処理方法や非常時の汚物の捨て方を学んだ。

会長の3年丹野寛代さん(20)「可児市」は「災害は他人事に感じていたが、記事を読んだり会の仲間が被災した話を聞いたことで防災意識が高まった。衛生に配慮した排せつ対策を指導できるといい」と話した。

図5 2019年(令和元年)12月17日火曜日 岐阜新聞掲載記事

◆活動の目的

生活科学専攻の全学生を構成員として「ECO+ものづくりプロジェクト」の活動を行っている。ものづくりを中心にしたグループ活動、また地域の方々と接するイベント参加やワークショップの企画・運営を行っている。人と関わる機会を増やしコミュニケーション力を高めるだけでなく、グループでの商品企画・製作、イベントの企画・運営を通して仲間と協力し成し遂げる経験ができる機会を作っている。学生一人ひとりが、生活者として、社会人としての資質を向上させることを目的として活動している。また、本専攻は中学校・高等学校の家庭科教員を目指す学生が多く、これらの実践的な活動を通して被服製作の技能の習得をはじめ、地域社会と、また幅広い年齢層の方々と関わることで対人関係能力を身につけ、豊かな人間性を育むことをねらいとしている。

◆活動方法

2～4年生までの運営委員(3～4名)が年間の目標・計画をたて、それに基づき1～4年生の縦割りで構成された3グループのリーダー(3年生)が中心になり活動している。運営委員会、リーダー会を開催し、活動の計画と周知、グループ作品の開発・検討、グループ活動の問題点、イベント開催等の話し合いを行い、各グループがそれぞれのテーマと目標を持って活動できることをめざしている。

毎年、商品販売ができるクラフト展・手づくり市への出店、ものづくり体験のワークショップ、親子でのものづくり体験なども行い、地域の方々と関わり、環境に配慮した生活と、ものづくりの楽しさを伝えている。

◆活動報告・考察

令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、4月から大学閉鎖となり今までとは違うスタートとなった。3・4月は運営委員会・リーダー会を行い、活動目標や計画を検討した。対面授業ができなため、4年生が1年生でも製作できるように考え、マスクの作り方の動画を作成し YouTube に登録し学生に配信した(図1)。全学生が自宅で個性的で楽しいマスクの製作に取り組み、写真や zoom・SNS で情報交換するなど遠隔授業でも有効に活動することができた。製作したマスクは5月に近隣の高齢者施設などに配布した他(図2)、全世帯に配布されたガーゼマスクの使用しないものを、回収して岐阜市に寄付をした。また、6月の大学オープンキャンパスに参加した高校生にマスクの無料配布を行った(図3)。

毎年行っていた、岐阜市図書館分館でのワークショップと展示、各地

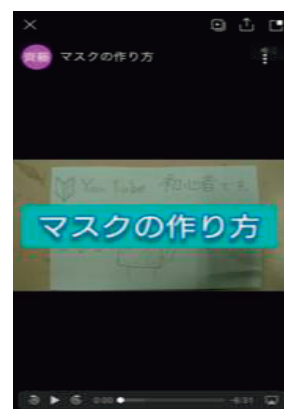


図1 マスクの作り方
YouTube



図2 配布したマスク

のクラフト展や手づくり市が中止になり、大学祭も中止になったことで販売とワークショップを行う機会がなくなってしまったが、コロナ禍の新しい生活様式に合わせた活動を行うことができたと考えている。6月からの対面授業開始後はグループでの作品製作を行い、社会の変化に合わせたものづくりを検討し、企画・製作に取り組んでいる。

10月3日には広々とした公園(岐阜金公園)で行われた小さなクラフト展に出店することができ、販売スタッフと運営メンバーの活発な様子と、明るい表情を見ることができた(図4)。お店に立ち止まってくれた方々、他の出店者の方々との情報交換や情報収集も行うことができ、貴重な時間であった。12月13日には柳ヶ瀬商店街活性化のイベント「柳ヶ瀬ハンドメイドコンテスト」のファッションショーに合わせて、柳ヶ瀬アーケード内でワークショップと手づくり小物販売を行う予定であった。中高生はじめ、一般の方も簡単なものづくりを体験し、楽しさを感じ興味を持ってもらうことができた。コロナの感染状況次第ではあるが、様子を見ながら例年通り2・3月には親子の手づくり企画を計画している。

この活動を通して、1年生は早い段階から先輩たちと関わりを持つことになり、学生生活にスムーズに馴染んでいく様子がうかがえる。

下に今年度のECO+ものづくりプロジェクトの活動内容を簡単に記した。

月	活動状況	運営・リーダー会
3・4	運営委員・リーダー・グループ決定	運営委員会・リーダー会
4・5	リモートでのマスク製作	商品試作
5	高齢者施設等への手作りマスク配布	運営委員会
6	新入生歓迎会	
	1年生技術指導 (ECOフラワー・裏付きトートバッグ)	
6・7	グループ活動開始 (商品企画・製作)	運営委員会
6	オープンキャンパスでのマスク無料配布	
7	懇親会 カレーパーティー (中止)	リーダー会
8～11	小さなクラフト展・さぎ草祭の商品製作	
10	小さなクラフト展出店	
11	さぎ草祭模擬店出店 (中止)	
12	柳ヶ瀬ハンドメイドコンテストに合わせ出店	運営委員会
2・3	親子の手づくり企画 (3年生担当・2回開催予定)	運営委員会



図3 オープンキャンパスでのマスク配布



図4 小さなクラフト展 出店

第 11 回 手づくり絵本コンクール

児玉愛子、藤木節子、宮本教雄、高橋正司、斎藤益美、三輪聖子

◆目的

2010 年より赤ちゃんが初めて触れる絵本「ブックスタート」をテーマとして「手づくり絵本コンクール」を実施している。今年で第 11 回を迎えることとなった。

絵本が子どもの発達に良い影響を与えることは、様々なところで言われており、成果も報告されている。また、製作者自身も子ども理解と優れた絵本への関心を深めることができ、創造力と想像力、手先の使用による脳への刺激など有用性は多く認められている。学校教育の一環として絵本製作に取り組み、その成果を発表する場として、絵本コンクールを実施する。

◆活動方法

チラシの配布、大学ホームページなどを通して、中学生以上を対象に作品を募集している。絵本は、一般絵本、布絵本、立体絵本、仕掛け絵本など乳幼児を対象にして、手づくりとしている。

4 人の審査員によって厳選なる審査を実施し、大賞 1 点、優秀賞 2 点、岐阜女子大学賞 2 点、入賞 3 点、特別賞 2 点を選出した。11 月のさぎ草祭期間中に表彰式を行なう。なお、選出された作品は、1 月末まで岐阜女子大学図書館にて展示を予定している。

◆活動結果・考察

第 11 回の応募数は 339 作品であった。昨年度より 60 点ほど減少しているが、今年度は新学期から新型コロナウイルスの関係で学校が休校になり、作品製作に取り組めなかったところも少なくない。それが減少につながったのではないかと考える。今回は一般の方の応募が例年になく多かった。HP をみて広い地域からの応募があり、生涯学修の一環として高齢者の参加も目立った。

絵本として絵とストーリーが重要であるが、ストーリーの無いものや「しつけ」のような内容になっているものもある。対象の乳幼児に合わせ、ストーリーや絵を考え、丁寧に心を込めて作品を製作する必要がある。



大賞



優秀賞



岐阜女子大学賞



入賞



特別賞

第7回 伝統文化裁縫コンテスト

児玉愛子、藤木節子、三輪聖子、齋藤益美

◆目的

平成 25 年度より中学・高校生を対象に、伝統文化裁縫コンテストを実施している。今年で 7 回目を迎えることになる。中学・高校生が日本の伝統文化に触れ、布を用いて作品を製作することを通して、製作に関する基礎的・基本的な知識および技能を身に付けるとともに、物作りの楽しさを実感し、生活を豊かにするために活用する能力と創造力を育てることをねらいとしてコンテストを実施する。

◆活動方法

テーマを「オリンピック」とし、2020 年に東京で開催されるスポーツの祭典「オリンピック」をテーマに自由でオリジナルな発想とし、チラシの配布、大学ホームページで、県内を中心に全国の中学・高校生を対象に作品を募集している。『東京オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典のみならず、日本の文化・おもてなしの心など、海外からも注目が集まっています。未来に向けて、世界と日本をつなぎ、日本から発信する新しいデザインを提案してください。』と呼びかけた。

作品は衣装を製作する衣服作品部門と、高度な技術がなくてもできるアイデア作品部門とに分かれており、家政系以外の高校生や中学生が興味を持ち応募することも期待している。

◆活動結果・考察

衣服作品部門の 1 次審査応募作品数は 46 点、アイデア作品部門は 42 点であった。

○衣服作品部門の優秀作品

最優秀賞



佐野 生来

岐阜県立岐阜城北高等学校

優秀賞



須田 江莉菜

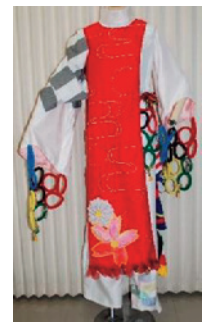
岐阜県立東濃実業高等学校



小椋 花恋

済美高等学校

大学賞



藤野 二千翔

岐阜県立大垣桜高等学校

○アイデア作品部門の優秀作品

最優秀賞

後藤 瑞季

岐阜県立東濃実業高等学校



第十回 岐阜マザーズコレクション・コンテスト参加

藤木節子

◆目的

平成 30 年度に引き続き、一般社団法人岐阜ファッション産業連合会が主催する第十回岐阜マザーズコレクション・コンテストにファッション分野に興味・関心を持ち、コンテストへの応募を希望する学生対象に挑戦をさせた。

◆活動方法

岐阜マザーズコレクション・コンテストは産学コラボレーションプロジェクト(岐阜ファッション産業ブランド確立支援事業)は、岐阜アパレルメーカーと未来のデザイナーを目指す学生とのコンテスト形式の企画である。『お母さんにきてもらいたい「素敵なお母さん服」をコンセプト』にお洒落で着易く斬新な未発表オリジナルデザインを公募している。

募集テーマは「Sweet10」(スイートテン)～ありがとう、これからもよろしく～

年号も平成から令和に代わり節目の年。年代と共に「お母さん」のイメージも変化してきている。母として、女性として活躍しているお母さんへの感謝の気持ちを込め、特別な日のスタイルを提案する。9月6日募集締切で1年4名、2年1名、3年2名の計7名がデザイン画10点応募し、2名が一次審査で選ばれ作品を製作した。(全国の大学、専門学校、高校から138点の応募があり、13点が一次審査通過。)

◆活動結果・考察

一次審査(デザイン画)に通過(写真1)し、製作した本学の学生作品は以下の通りである。

1年 飯野ほのか テーマ「カジュアルモントーン」(写真2)

3年 池田鈴音 テーマ「美しさと柔らかさ」

写真1 一次審査通過・デザイン画13点の展示



写真2 飯野デザイン画



11月30日じゅうろくプラザにおいて二次審査(公開審査会)が行われ、飯野ほのかさんの作品が、シルバー賞 岐阜県繊維協会会長賞受賞した。グランプリ、ゴールドに続く三番目の好成績を修めることができた。第10回記念の特別イベントとしてファッションショー形式のコンテストスタイルで行われた。また、3月には学長表彰を受賞した。



写真3 飯野さんによる作品プレゼン



写真4 イタリアからの特別審査員による講評の様子

受賞作品の製作意図は、デニム生地をメインに使い、カジュアルなお洒落なお母さんのお出かけ用に仕上げた。トップスは白地にリボンテープを縫い留めてボーダー柄を作り、スカートは大中小形の違う6枚のパンチカットのデニム地を使って、素材や切り替えの面白さを出した。40代女性が気になるヒップや脚などは下半身をボリュームのあるフォルムで隠しつつ、斜めにタックを入れてふんわりとまとめ、女性らしい可愛さを表現した。

－考察－

昨年度に続き学生の外部コンテストへの挑戦により、デザイン・企画力及び表現力、製作技能の向上とともに、学外における評価が実感でき学生達の課題把握と自信となり、更に前向きな姿勢・やる気へと繋がったと感ずる。

今後でもできる限り多くの学生が、可能性への挑戦をし、ものづくりのプロセスを通して多岐にわたる経験を積む機会となると良いと考える。

「第29回ア・ミューズ岐阜」が令和2年3月2日～3日の二日間じゅうろくプラザ並びに間屋町全域で開催される予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。8名の学生が昨年度に引き続きスチューデントプレビューショーに参加する予定で作品製作を行っていたため、今後作品の発表の機会があることを期待したい。



写真5 飯野作品



池田作品

食 生 活 研 究 部 門

〔活動報告〕

第12回 高校生朝ごはんコンテスト・・・・・・・・・・・・・・ 19

藤田 昌子・片桐 幸子

和田 玲子・大場 君枝

瀬上 佳世・中村 日南

第 12 回 高校生朝ごはんコンテスト

藤田昌子、片桐幸子、和田玲子、大場君枝、瀬上佳世、中村日南

◆ 目的

「朝ごはん」の大切さを広く高校生の皆さんに理解してもらい、朝食作りへの取り組みを通じて欠食を減らすことを目的に高校生「朝ごはん」コンテストを継続して開催している。本年度は昨年度と同様に高齢化社会において、国が目指している国民の健康寿命の延伸を意識したテーマとした。「～家族の健康寿命をのばそう！パパッとできる生活習慣病予防のための朝食～うす味で、黄(主食)・赤(主菜)・緑(副菜)、揃ったごはん」をテーマとして開催した。

◆ 活動方法

朝ごはんメニューは、「うす味の工夫がされた主食・主菜・副菜が揃った家族の朝ごはんメニューである」、「お米(米粉含む)と地域産物を使用する」、「1食あたり450円以内、30分以内で作ることができる」、「自分で工夫したメニューが1品以上あること」とし、指定の応募用紙で料理写真、レシピを応募してもらった。7月20日(月)～9月18日(金)まで作品を募集した。そして、10月11日(日)に学外の審査員3名および学内教員3名による書類審査を行い、入賞12点と入選50点を選定した。

◆ 活動結果・考察

応募総数は31の高校から263作品集まり、岐阜県内だけでなく、北は宮城県や群馬県から、南は広島県、鹿児島県、沖縄県などから応募があった。応募者の所在地ならではの食材が使われ、家族の健康を考えた作品が多く寄せられた。入賞者には11月7日(土)開催の実技審査に参加してもらい、最優秀賞1点、健康栄養賞1点、アイデア朝ごはん賞2点、優秀賞2点、入賞6点を決定する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、実技審査の開催は叶わなかったため、以下の12作品を入賞とし、賞状と副賞を授与した。



愛知県立岩津高等学校
友井愛梨咲さん



愛知県立岩津高等学校
原田未羽さん



愛知県立安城高等学校
金子明日香さん



専修学校東洋調理技術学院
愛知産業大学三河高等学校
菅原祥仁さん



岐阜県立大垣東高等学校
吉原有那さん



岐阜県立岐阜城北高等学校
若林沙也加さん



岐阜県立東濃実業高等学校
西田有希さん



高岡龍谷高等学校
鈴木舞桜さん



高岡龍谷高等学校
森岡真歩さん



古川学園高等学校
遠藤諒生さん

他
岐阜県立大垣養老高等学校
高木 友菜さん

岐阜県立岐阜城北高等学校
末廣 ちづきさん

以上 入賞 12作品

住 生 活 研 究 部 門

〔活動報告〕

各務原市空き家リノベーション事業.....	22
黒見 敏丈・大崎 友記子 森田 実沙	
根羽村森林組合との連携事業.....	26
黒見 敏丈・森田 実沙	
実習棟リノベーション工事.....	28
大崎 友記子・黒見 敏丈 森田 実沙	
第11回わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト2019	30
大崎 友記子・富士 覇王 黒見 敏丈・森田 実沙	

各務原市空き家リノベーション事業

黒見 敏丈・大崎 友記子・森田 実沙

◆目的

本事業は、深刻化する空き家の増加と人口減少に対応するため、若い世代の移住・定住を促進するために、産官学金の四者の連携協定を結び空き家のリノベーションを進めようとするものである。そのため、本学には建築・インテリアを学ぶ女子大生の若い自由な発想に基づく空き家のリノベーションデザインの提案を求められたものであり、昨年度に引き続き4年目の事業である。

◆活動方法

本事業は、インテリアデザイン論・実習Ⅰ・Ⅱ(3年生の授業科目)の1つの課題として、受講生7名が市より提示されたモデル空き家4軒のリノベーションデザインに取り組んだものである。

◆活動概要・考察

(1)対象空き家物件の現地調査:7月19日(金)

市から5月初旬に提供を受けたモデル空き家物件(4件)の基本図面と写真を踏まえ、リノベーションデザインのプラン作成のための現地調査を行った。教員2名と学生7名が2台の車に分乗して4軒を巡り、周辺の環境や建物の現状を把握するとともに、細かな部分の採寸等を行った。



図1 現地調査の様子1



図2 現地調査の様子2

(2)リノベーションのコンセプトの明確化とデザインの具体化:10月3日(木)~11月26日(火)

夏休み中に各自が暖めてきたリノベーションのコンセプト等を明確化し、そのコンセプトに基づいてリノベーションデザインの具体化を図り、3D-CADソフトや手描きのスケッチパースによりプレゼンテーションシートにまとめていった。

(3)成果の報告会:11月27日(水) 13:30~15:00 於 大学10号館10302教室

市の担当課、各務原市空き家リノベーション事業推進会議会員の民間設計事務所、空き家の所有者の方々を本学にお招きし、学生が7つのデザイン案のプレゼンテーションを行った。学生の思いのこもったプレゼンテーションに市の方々も感激され、その内容も大変好評であった。市では、これらの

提案を受けて、空き家の利活用の促進に努める予定となっている。



図3 報告会の様子1



図4 報告会の様子2

今回の事業は、学生にとっては、現存する建物を対象としてリノベーションデザインに取り組むことができ、またそのデザインに基づいて実際にリノベーションが行われる可能性を持っているという点で、通常の授業課題とは異なり、緊張感と期待感を持ちながら真剣にデザインに取り組めたと考えている。昨年度に引き続きこのような機会を提供していただいた各務原市には深く感謝申し上げる次第である。

(4) 空き家リノベーション工事の継続

今年度事業でも、昨年度に引き続き、実際の空き家のリノベーションデザインの提案及びその工事に取り組むことができた。

対象となった空き家は、各務原市空き家リノベーション事業推進会議会員の工務店がサブリース契約を結んだ物件で、この工務店および各務原市との産官学連携事業として実施した。なお、リノベーション工事は特別プロジェクト実習と連携し、3年生だけでなく、1・2年生も参画した。以下に事業の大まかな流れを示すとともに次頁以降に写真等のデータを提示する。

7月 19 日(金) 対象空き家物件の現地調査

9月 11 日(水) プラン提案及び打合わせ

11月 13 日(水) 内装提案及び打ち合わせ

11月中旬 着工

2月中旬 完成

2月 28 日(木) 完成披露会

昨年度に引き続き実際にリノベーション工事が実施され、その工事にも参画できたことは学生にとって大変大きな刺激となった。また、今年度事業は文科省私立大学研究ブランディング事業の一環として事業の詳細な記録及び DIY での空き家リノベーションの参考となる DVD の作成までを実施することができ、今後の空き家リノベーション事業の発展につながるものとなった。

空家 × リノベ × 住居学 2019-2020

築50年の木造長屋の空き家リノベーション提案



深刻化する空き家問題に対処するために、空き家を改修（リノベーション）して活用を図る事業が各地で進められています。産官学（工務店・設計事務所×各務原市×岐阜女子大学）連携で若い世代を受け入れるために、空き家リノベーション事業を行っています。昨年度に引き続き、私たちはリノベーションデザインの提案、工事、借り手募集のお手伝いを行っています。

before



今回は、1棟に2戸入っている長屋タイプの物件です。そのため、現況と同様に各戸を単身者または二人暮らし程度のワンルームタイプとする提案と、2戸を1戸にし、若いファミリー向け、もしくはシェアハウスのようにできないかと考え、いくつかの提案を行いました。結果的には、現状の構造を可能な限り活かし、2戸を1戸にする3LDKタイプのプランでリノベーションを進めることになりました。

提案例1 ワンルームタイプ



提案例2 2LDKタイプ



築50年の木造長屋の空き家リノベーション提案

Major
in
Housing
and
Design

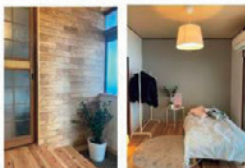
リビングイメージベース

[illegible]

12月上旬 床下地工事 >>>>>>>>>>>>>>>



12月上旬 床張り工事

[illegible][illegible]

根羽村森林組合との連携事業

黒見 敏丈・森田 実沙

◆目的

本事業は、岐阜県及び愛知県との県境に位置する長野県根羽村の森林組合から、村特産の杉材（根羽杉）等の販路拡大と観光等による村の活性化の方策について女子大生のアイデアを求められたものであり、2017 年度より継続している。本稿では、2020 年 3 月に実施した家具製作研修及び 2019 年 3 月及び 2020 年 3 月に実施した学食再リフォームについて報告する。

◆活動方法

本事業は、本学住居学専攻の教員及び学生の企画提案に対し、根羽村森林組合より資材や人材等の提供を受けて、学生主体で活動を展開している。

◆活動概要・考察

(1)家具製作研修:3月12日(木)～14日(土)

根羽村に宿泊しながら学習机等の家具製作を行う観光商品企画のテストケースとして、本学住居学専攻3年生の有志8名による家具製作研修を合宿形式で実施した。

今回製作した家具は、現在特別プロジェクト実習でリノベーションしている実習棟で使用する、テーブルと椅子、座卓で、そのデザイン、図面(図1)はあらかじめ学生が作成し、根羽村森林組合に送って、準備をしておいていただいた。

3日間で墨付け、仕口等の加工、組み立て、塗装までを行う工程であったが、森林組合の方々の指導・サポートのおかげで、事故もなくスムーズに進めることができた(図2～3)。また、古い学校を改装した宿泊施設に泊まらせていただいたが、自分たちで食事をつくったりして、楽しく過ごすことができた。このような観光企画商品もおそらく満足度の高いものとして実施可能であろうことが体感できたことは大きな成果であった。

今回作成した家具の仕上がりも上々で(図4)、早く実習棟のリノベーション工事を完了して、配置してみたいものである。

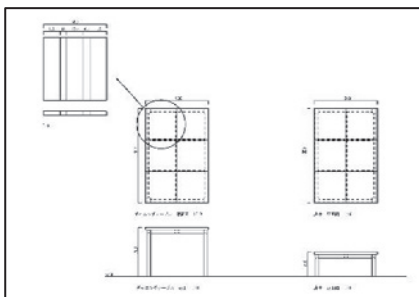


図1 家具図



図2 作業の様子1



図3 作業の様子2



図4 完成した家具と記念撮影

(2)食堂再リフォーム:2019年3月25日～26日・2020年3月23日

2008年にリフォームを行った本学の食堂は、机が壁面に当たることによりクロスの剥離や汚損が目立っていたため、根羽杉の活用例の一つとして、食堂の腰壁部分をクロスから無垢の根羽杉に変更するリフォーム工事を実施した。

事前に根羽村森林組合の方々と打ち合わせを行い、羽目板や見切り材の加工を依頼した。2019年3月の工事では、1年生から3年生まで約20名の有志の学生が参加し、森林組合の方の指導を受け、リフォーム工事を実施した。既存のソフト巾木を撤去した腰壁部分の上下に見切り材を取り付け、その間に羽目板を順番にはめ込む方法で行った。グループに分かれて作業を分担しながらスムーズに進めることができた(図5)。2020年3月の工事では、一度目の工事で材料が不足し、未施工の部分があったため、1年生有志5名の学生による残工事をを行った(図6)。

日常的に自分たちが使用する身近な大学の施設の一部を自らの手でリフォームできたことは、学生にとっても大変良い機会になり、また、学校関係者からも良い評価を得ることができた(図7)。



図5 作業の様子1

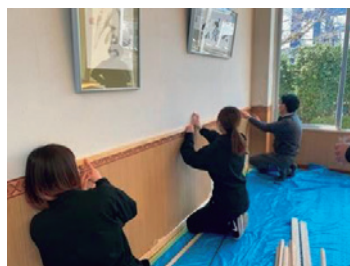


図6 作業の様子2

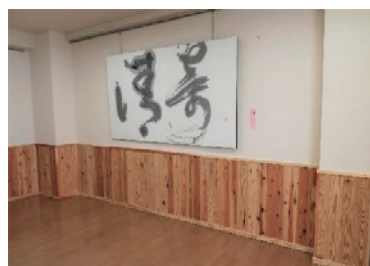


図7 リフォームした腰壁

(3)まとめ

年度末の慌ただしい時期ではあったが、新型コロナウイルス感染拡大の前に実施できたことは大変幸運であった。家具製作研修も学食再リフォームも根羽村森林組合と根羽村のご指導、ご支援が無ければ実現できないものであった。この場をお借りして謝意を表する。

実習棟リノベーション工事

大崎 友記子・黒見 敏丈・森田 実沙

◆目的

特別プロジェクト実習では、平成 16 年度以降、実際の建物の企画設計から建設、及び大学施設のリフォーム提案、改修工事等を 1～3 年生が協働で実施するプロジェクトを展開してきている。本プロジェクトもその一環として実施しているものである。

◆活動経緯

(1)コンペの開催

平成 30 年度に災害時浴室棟を完成した後、次に特別プロジェクト実習で取り組む内容を、在校生全員参加のコンペをおこない、大学側に提案をすることになった。そのため、取り組む内容を春季休暇中の課題として在校生に提示した。新年度が始まり、コンペ用のプレゼン資料作成をすすめ、5 月 2 日(木)に発表会をおこなった。コンペでは、大学生活を充実させるための施設の提案(憩いの広場、トレーニングルーム、県人会館等)や既設施設を利活用するリフォーム提案(華陽記念館のリフォーム、クラブハウスのリフォーム、図書館のリフォーム等)など、様々な提案がなされた。

(2)大学側へのプレゼン

5 月 2 日(木)に発表された案の中から、1号館ラウンジのリフォーム案、1号館エントランス廻りのリフォーム案、実習棟のリノベーション及び 10 号館南側の外構計画案の 3 つを、5 月 30 日(木)に大学側へプレゼンテーションをおこなった。その結果、再度 6 月 27 日(木)に、実習棟のリノベーション及び 10 号館南側の外構計画案を練り直して、プレゼンテーションをおこなうことになった。

6 月 27 日(木)には、実習棟の現状説明として、学習室からレクリエーションの場としての利用状況の変化、老朽化が進みメンテナンスの必要性、県人会などより多くの学生が利用できる空間とする提案説明をおこなった。また 8 月 5 日(月)には、理事会でも工事期間を含めた実習棟リノベーション案の説明をおこない、特別プロジェクト実習での実施許可をいただいた。



図 1 大学側へのプレゼンの様子



図 2 プレゼンシート

◆活動概要・考察

(1)見積依頼

工期を令和元年 10 月から令和 3 年 2 月までとし、プレゼンテーション用に作成した図面とパースをもとに、見積ができる平面図、立面図等を作成した。そして 8 月 30 日(金)に山県市の工務店に見積依頼をし、工事全体予算の打合せをおこない、大学側に了承を得た。

(2)工事作業

10 月 10 日(木)第 1 回目の特別プロジェクト実習では、実習棟リノベーションの計画説明、作業工程、作業内容の説明をおこなった。

10 月 17 日(木)の第 2 回目は実習棟内の備品の片付け、南側のデッキ撤去、竹垣撤去作業をおこなった。

10 月 24 日(木)～11 月 21 日(木)は西側、南側の外壁撤去、既設サッシの取り外し工事。

11 月 28 日(木)～1 月 30 日(木)は室内の土間部分の床組み、フローリング部分の床組み、新設サッシ取付のための外壁調整等をおこない、今年度の作業は終了した。



図 3 外壁撤去作業の様子



図 4 床組み作業の様子

(3)考察

今回の実習棟リノベーション計画は、住居学専攻の多くの学生が実習棟の使用方法に不便を感じ、老朽化した部分の修繕の必要性を感じていたことからコンペで支持を得た。建物は定期的にメンテナンスが必要で、年数が経ることで利用目的も変わることを実感し、この先の使い方を見越して、またより多くの学生が利用しやすい形に提案する機会を得た。この体験は、社会で求められる企画提案そのものである。また、先輩たちが建設した建物を、大切に使う気持ちが芽生えたことも、このリノベーションの大きな意義であると思う。次年度はリノベーションの完成を目指す、実習棟の設計、建設に関わった卒業生を招待して、交流を深める機会も設けたい。

第11回わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト 2019

大崎 友記子・富士 霸王・黒見 敏丈・森田 実沙

◆目的

建築及びインテリア関係への進路を選択する動機づけとなることを期待すると共に、大学と高等学校等が連携し多様な学習機会を提供する一つの活動の場として『わたしの住まいリフォーム・デザイン案コンテスト』を開催している。このコンテストは11回目となり、次の活動方法に示すとおり技術・デザイン部門とアイデア・デザイン部門の2部門で実施している。

◆活動方法

今年度は「ペットと暮らす」住まいを対象に、「技術・デザイン部門」と「アイデア・デザイン部門」の2部門でリフォームの提案を募集し、それぞれ優秀賞、奨励賞について賞状と副賞を11月9日(土)に交付した。入賞作品は、岐阜女子大学家政学部生活科学科住居学専攻 HP に掲載すると共に、2020年2月21・22日、岐阜柳ヶ瀬「てつめいギャラリー」にて展示した。

(1) 応募期間 2019年8月19日(月)～9月16日(月・祝)

(2) 募集内容 住まい全体、あるいは住まいの一部を対象として選び、現況の様子あるいはリフォーム前の写真や図と、リフォーム後の構想を平面図(寸法記入は不要)・立面図・透視図などに表現

(3) 応募資格 高校生・短期大学生

(4) 作品応募規定

A:技術・デザイン部門

提題された住まい(本学 HP 掲載)を対象にして、ペットにも住み手にも暮らしやすい「ペットと暮らす」ためのリフォーム提案でペットと共生できる住まいであるかを評価

B:アイデア・デザイン部門

「ペットと暮らす」ための楽しい発想や斬新な図面表現、身近な実践例などを評価
(リフォーム前の状態を図面や写真等で表現してください)

(5)審査員

今田太一郎 一般社団法人 日本建築学会東海支部 岐阜支所長

独立行政法人 国立高等専門学校機構 岐阜工業高等専門学校 建築学科 准教授

入山 要 公益社団法人 岐阜県建築士会 岐阜支部支部長

株式会社山田組 一級建築士 総務部長

大崎友記子 岐阜女子大学家政学部生活科学科住居学専攻 教授・専攻主任・一級建築士

富士霸王

同上

教授・学生部長・家政学部長

一級建築士・岐阜県建築審査会会長・岐阜県建築士審査会会長

黒見敏丈 岐阜女子大学家政学部生活科学科住居学専攻 教授・大学院生活科学研究科長・一級建築士
森田実沙 同上 講師・一級建築士

◆活動概要・考察

今年度は、ペットと暮らす住まいをテーマとして、コンテストを開催した。岐阜県はもちろん、新潟県、富山県、静岡県、愛知県などの高等学校から、技術・デザイン部門に 42 作品、アイデア・デザイン部門に 95 作品、合計 137 作品の応募があった。ご指導をいただいた先生方には、深く感謝を申し上げます。また岐阜県建築士会岐阜支部様より、本コンテストの趣旨にご賛同をいただき、今回も建築士会賞の表彰をさせていただいた。今年度は3年ぶりに特選の作品が選ばれ、発想力と表現力に優れた作品が多数見受けられた。技術・デザイン部門では、特選1点、建築士会賞1点、優秀賞3点、奨励賞2点、アイデア・デザイン部門では、優秀賞4点、奨励賞4点の入賞作品、両部門を通して学校賞が1校という入賞結果となった。受賞された皆様には、その努力に対し敬意を表し賞状と副賞を贈呈した。審査員の皆様をはじめ、関係の皆様にも厚くお礼申し上げます。



図1 表彰風景



図2 表彰式記念写真

岐阜女子大学 衣食住生活研究センター 研究・活動レポート
第 5 号

発行年月日	令和 2 年 12 月 25 日発行
発 行 者	岐阜女子大学 〒501-2592 岐阜市太郎丸 80 番地 TEL058-229-2211
印 刷	ヨツハシ株式会社 〒501-1136 岐阜市黒野南 1 丁目 90 番地 TEL058-293-1010